

R3 年度エゾシカ捕獲対策実施状況

1. 土砂堆積場における捕獲

1.1. 捕獲結果

合計 43 頭（オス 6 頭、メス 4 頭、子 6 頭）のエゾシカを捕獲（令和 4 年 2 月 15 日時点）（表 1）。

表 1. 土砂堆積場における捕獲の概要

日付	捕獲頭数			
	小計	内訳		
		オス	メス	子
令和 3 年 10 月 19 日	給餌開始			
令和 3 年 11 月 24 日-25 日	ワナ設置			
令和 3 年 12 月 24 日	捕獲待機のみ			
令和 3 年 12 月 26 日	捕獲待機のみ			
令和 4 年 1 月 5 日	6	3	1	2
令和 4 年 1 月 18 日	11	1	6	4
令和 4 年 1 月 25 日	6	1	1	4
令和 4 年 2 月 2 日	10	1	7	2
令和 4 年 2 月 9 日	10		4	6
合計	43	6	19	18

1-2. 課題と対策

① 設置時季と天候：

11 月に大型囲いワナを設置したが、地面が凍結せず支柱が固定されなかった。

風速 20m を越える強風によってワナが傾いた。

→ 支柱の追加等で補強・修繕を実施した

② オス個体の取り扱い：

オスが餌場を占拠してメスや子をワナ外へ追い出すことが多く、捕獲機会が減少した（写真 1）。

→ 捕獲数は減少するが、餌場を占拠するオスがいる場合は優先的に捕獲した。



写真 1. 捕獲直前に Web カメラで撮影したワナ内の様子

2. 赤沼における試験捕獲

2-1. 目的と留意点

令和2年度の航空カウント調査により、宮島岬周辺（U16）にエゾシカが高密度で生息することが確認された。一方、アクセスが極めて限られており捕獲が困難な地域である。

GPS首輪個体の追跡結果（平成26~27年度：推進費事業）により、赤沼周辺を利用する個体は宮島岬（雪裡川南岸など）への移動が確認されており、赤沼周辺での捕獲が湿原核心部（宮島岬周辺）での個体数調整にとって有効な対策となりえる。

しかし、当該地は湿原内に大型囲いワナを設置できても生体搬出が不可能であった（例：搬出用ユニットの作業半径外となる等）。そこで昨年度より、堤防を損傷しない新たな生体搬出方法を検討してきた。

検討の結果、湿原内の大型囲いワナから右岸堤防の天端近くの法面まで「エゾシカ誘導路」を設置して捕獲個体を誘導して搬出する方法で、試験捕獲を実施することになった（写真2）。

試験捕獲の実施にあたり、特に湿原生態系への影響、堤体に対する影響、動物福祉、作業員の安全確保を配慮項目とし、その対策を講じた（表2）。

表2. 誘導路を用いた捕獲における配慮項目と対策

配慮項目	主な対策
湿原生態系への影響	<ul style="list-style-type: none">・踏圧での踏みあらし等を低減するため、湿原が凍結してからワナ内で餌付けを開始・追い込み区など特にダメージが大きくなると想定される箇所はなるべく高層湿原の設置を避ける・誘引場所を分散させることによるエゾシカの集中的な踏圧の削減（餌場を複数個所に設置）
堤体に対する影響	<ul style="list-style-type: none">・堤体法面の保護のため、特にダメージが懸念される追い込み区の地面に植物性むしろを敷く・エゾシカは搬出直前に法面の追い込み区に移動させ、極力、堤体上の保管時間を短時間化
動物福祉	<ul style="list-style-type: none">・獣医師の配置・怪我や損傷を防ぐように誘導路内の突起物等の排除と点検の強化
作業員の安全確保	<ul style="list-style-type: none">・誘導路には救助・脱出用サブゲートを設置・誘導員はヘルメット、盾を着用する・事前にシミュレーションを入念に実施



写真2. 設置した大型囲いワナおよび誘導路の全景（1月11日撮影）

誘導路（追い込み区 A から追い込み区 B まで）は、全長が約 50m、幅は約 90m、壁面の高さは 3m。

2-2. 試験捕獲結果

（1）エゾシカの事前誘引

秋季に堤防法面に集中するエゾシカは、例年であれば季節とともに移動し、堤防周辺の個体数は減少する。これらを冬期の捕獲時まで留まらせるために、令和 3 年 10 月 19 日より給餌を開始した。ワナ設置予定場所のみならず、ワナから南北に約 1,000m 離れた堤防周辺の環境でも幅広く給餌した。

ワナの設置場で給餌直後から目視で 30-40 頭のエゾシカが確認でき誘引状況は良いと判断した。

（2）捕獲結果

2 月 18 日時点で、5 回の試験を実施し、計 43 頭のエゾシカを捕獲した（表 3）。誘導路でエゾシカが止まる・反転するなどのトラブルが懸念されたが、いずれの試験捕獲においても、捕獲の開始前から十分な配慮を講じたこともあり、順調に捕獲と誘導が進んでいる（写真 3）。

表 3. 試験捕獲実施日および捕獲頭数

日付	捕獲頭数			
	小計	オス	メス	子
令和3年10月19日	給餌開始			
令和3年11月28日	ワナ設置開始			
令和3年12月21日	ワナ設置完了			
令和3年12月27日	5		2	3
令和4年1月6日	14		9	5
令和4年1月21日	8		4	4
令和4年2月2日	9	1	4	4
令和4年2月16日	7		4	3
合計	43	1	23*	19

(おとり個体として放獣した個体は含まない)



写真3. エゾシカの馴化の状況
作業員がワナ内においても群れが入ってくる状況

2-3. 調査項目と結果

誘導路の運用前例がないため、捕獲実施の際には表4に示す項目について調査を行った。

表4 調査項目と調査内容及び結果

調査項目	調査内容及び結果
エゾシカの誘導路の警戒	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誘導路内に事前に給餌を実施。自動撮影カメラでモニタリング ・ 誘引実施2日後に誘導路内の利用を確認
エゾシカの誘導路内での行動把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4回の試験捕獲で12回の誘導を実施 ・ 誘導中のエゾシカの行動観察と誘導時間の測定 ・ 誘導中に停止、反転することなく、約10秒～30秒でエゾシカを誘導した ・ 誘導頭数と誘導時間の比較 <p>1度の誘導頭数を3～6頭に設定し、群れ構成（メス成獣、メス成獣と子、メス成獣とオス成獣）で比較した。追い込みに費やした時間に差はなかった。</p>

2-4. 試験捕獲の課題と対策

試験捕獲の結果から抽出した課題や対策を①～⑥に示す。

① 馴化していない個体の誘導

- <現状> 作業員がワナ内で作業中でも採餌するほど十分に馴化した群れのみ捕獲した
→ 馴化個体が減少する可能性が高く、未馴化個体の誘導に留意した試験捕獲の検証が必要である。

② 誘導回数の低減

- <現状> 頭数や群れ構成による誘導時間に変化がなかった
→ メス（またはメスと子）の群れでは、1回の誘導頭数を5頭以上に設定することで、誘導回数を減らし、作業員のリスク軽減と作業の効率化が図れる。

③ オスの取り扱い

- <現状> 成獣オス1頭の誘導を試行し事故等の発生がなく完了した。しかし誘導時にオス成獣が反転した場合、作業員に危険が及ぶ可能性もある。
→ 脱出や救助者の出入り口としてサブゲートを増やす
→ 誘導路外に足場を設置して作業員が誘導路に侵入せずに誘導できる構造とする
→ 複数頭のオスを捕獲する際に、ワナ内の追い込み区で止め刺を選択肢とする

④ おとり個体（GPS首輪装着個体）の放逐

- <現状> 最も頻繁にワナと誘導路を利用する個体（推進費で装着したGPS首輪が未脱落）をおとり個体とし、捕獲後に放獣した。当該個体は、4回の試験捕獲で3回捕獲され、周囲のエゾシカの警戒心を下げたと考えられる。
→ 給餌に依存した“おとり”にて円滑に誘導を進められる可能性が高いが、標識個体が必要となる

⑤ 湿原への影響評価方法の検討

- <現状> 高層湿原における大型囲いワナの設置にあたって、高層湿原への影響を及ぼさないように、ワナの設置場所、給餌時期や方法にも配慮したが、植生への影響評価は不十分である。
→ 高層湿原への影響を評価できる手法を検討する

⑥ 他地区での応用

- <現状> 右岸堤防では、赤沼周辺以外にも多数のエゾシカが確認されている。ワナで誘引できる有効範囲は半径1km程度とされ、誘導路を用いた捕獲は、赤沼以外の右岸堤防、さらには他地域でも有効となる。
→ 個体数のモニタリング情報などを用いて、効果的に誘引できる場所の抽出、給餌を開始する